
思い出のものは一緒に

四季 ワタリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出のものは一緒に

【著者名】

Z5085B

【作者名】 四季 ワタリ

【あらすじ】

彼女は俺のことを不潔だと言った。トイレの後に石鹼で手を洗わないからとの理由で。でも俺には、そんな彼女も少し汚れているよう見えた。

「や、やめて！ そんなトイレの後に石鹼つけて洗わないよつな汚らわしい手で私に触らないで！」

「は、はい？」

「いかにも臭いそなその手で、触らなこでつて言つてるの… それ以上近付けたら警察呼ぶわよー いや、でも呼ぶとしたら、ゴミ収集車かバキュームカー……のほうがいいかも？」

「な、なんでそうなるー？」

「……不潔だから」

効果音で表すとしたら“グサツ”という音がピッタリな状況だった。鋭利なナイフで突き刺されたかのような激しい痛みが心の中をほとばしる。痛い！ 思わず叫びそうになるのを何とか抑えて、反撃に打つてである。

「ふ、不潔じやねえよー てか、トイレの後はひゃんと手を洗つてるから」

「石鹼つけ？」

「……時々は」

「時々？ やつぱり不潔だよ、君。私に触れる資格無し」

「好きで触れたかないよ！　触れないから早く出てけ、ここに俺の家だから！」

そう叫ぶと田の前に立る彼女は少し悲しそうな表情をした。ダークブラウンのいまにも泣き出しそうに潤んだ瞳が俺を捕えて、胸の詰まる思いがする。罪悪感が徐々に込み上げてくる。自分は何も悪くないのに……。

彼女は突然にこの部屋に現れた。引っ越しの準備をするために部屋を片付けていた時のことだ。用を足すとおもいトイレにいった、そのわずかの時間に、先程までは自分一人しかいなかつた部屋に彼女は存在していた。サラサラとした長くて美しい黒髪に、ダークブラウンの瞳、綺麗な顔立ちをした子だった。

最初はびっくりして焦つてしまつたが、焦りながらも何とか接触を試みた。どこから来たの、名前は何て言うの。何度も同じ質問を繰り返したが、返事はなかつた。そして、仕方が無く、近くの交番に連れて行こうと思つて手を伸ばした時だつた。

やめて、汚い

それからずっとその調子だった。

「じめん……少し言こ過ぎた」

「……私の家だつて……」「の家だもん……」

彼女は瞳から溢れんばかりの涙を拭つた。それとともにぐすんつ、とこう泣き声も一緒に聞こえてきた。罪悪感がますます浸蝕していく。

「」「だもん、って……の家には俺と両親以外は居ないはずなん

だけど……」

そう言つと彼女は完全に顔を下に向けて俯いてしまつた。その肩はプルプルと震えている。そんな仕草をされても俺は何を言つて上げればいいのか、まったく分からなかつた。自分が正論を言つているし、彼女が何をしたいのかも理解できなかつたからだ。しかし一人の間には沈黙がながれた。ムズムズとした感覚が背中を駆け巡つて行く。自分の部屋のはずなのに妙に緊張していて、手のひらが汗ばんでいた。

「……ねえ」

唐突に彼女は言葉を発してきた。嗚咽まじりの声だつたが、まだ彼女は顔を伏せていて表情をうかがいしることはできなかつた。

「……なんだ?」

「……私からも一つ言いたいことがあるんだけど……」

「……言いたいこと?」

何を言われるのか分からず、少し心臓がドキドキとする。だが返ってきた言葉に俺は啞然としてしまつた。

「私を“キズもの”にした責任はしっかりと、とつて貰うからね!」

「な、な、何!」

相変わらず潤んだ瞳だが、しつかりと俺の瞳をとらえて彼女ははつきりと言い放つた。俺は動揺を隠せない。きっと彼女からみ

れば不審者か、とでもおもわれて仕方無い程、目はキヨロキヨロと宙をおよいでいるに違ひなかつた。

「ば、馬鹿かお前は！　お、俺と、お、お前がいつ、そんな関係を持つたんだよ。て、てか俺、年下には興味無いし……」

自分で何を言つているのか意味不明だつた。ただ体中が燃えるようになつた。

「痛かつたなあ、あの時は……君がまだ三才のころの……」

「三才のころの……」

「そう。まだ私がピカピカの新品で買われて、この家に初めてきた時のこと。君はその日に早速、赤いクレヨンで私の体に落書きしてくれたわ」

「…………」

「そう言えば五才になつたばかりの時にも、私を乱暴に扱つて、何枚かページが剥れて……君はお母さんに叱られたよね」

しゃべつてゐる彼女の表情がみるみるうちに晴れやかになつていった。そんな彼女を見て、俺は何だか懐かしい気持ちで胸がいつぱいになつた。ホカホカとした温かい気持ちが自然と込み上げてくる。俺は彼女を知つていた。クレヨンでの落書き、ページの剥げ落ちた本。間違いない、そんな扱いをしていたものはこの家に一つしかなかつた。それは大切な、この世で唯一無二の自分の宝物だつたものだ。そして俺は知らず知らずのうちに彼女の名前を呟いていた。

「もしかして君は……！」

その時、彼女の体が突然白色に輝き出した。その光は瞬く間に部屋中に満ちていく。眩しくて目が開けられない中、その光の中心から彼女の最初で最後の笑い声を聞いたような気がした。

「馬鹿は君の方だよ、何年間も放つたらかしにしといて……あ！でも新しい家には私も連れていくよな。もちろん、石鹼で洗った綺麗な手で私を扱ってくれるのならだけ……ね！」

田を開けた世界はいつもの自分の部屋だった。引っ越し準備中の散らかった空間。先程までの光は集束し部屋の隅で粒子となつて弾け、キラキラと美しく散つていった。俺は彼女を名残惜しむその場所に近付いていった。そこにあるのはビニール紐で結ばれた書物。その一番上に置かれている本が不思議なことに笑っているように見えた。

その本の題名は『オズの魔法使い』

幼い時に、何度も何度も繰り返し読んだ、赤いクレヨンでペイントを施されたボロボロの表紙の、大好きな物語だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5085b/>

思い出のものは一緒に

2010年10月10日03時50分発行